

# フェンシング競技における安全性の確保について

フェンシング専門部 森角 正

## A、国際大会における死亡事故からルール変更

ウラジミール・スミノフ選手（ソ連のフルーレ選手。1980年夏季オリンピック個人フルーレで金メダルを獲得。1981年世界選手権優勝）はローマで行われた1982年の世界選手権に出場した際、対戦相手の剣が試合中に破損し、折れた剣がマスクのメッシュの部分を通り、さらに眼窩を貫通して脳まで達した。スミノフは9日後に死亡した。

この事故は、フェンシングにおける安全な用具の飛躍的な発展を促す大きな契機となった。炭素鋼の剣からマレージング鋼を用いた剣へ、防弾チョッキ素材のケプラー繊維を用いたユニホームへ、そしてスミノフが使っていたものよりも2倍から3倍の強度を持つマスクが、安全性向上のための他の多くのルール改正に加えて開発された。マスクのメッシュは標準のもので12kgの検査に耐える必要があり、FIEマスクでは25kgである。スミノフ選手が当時使用していたマスクは、こんにちの標準マスクの半分程度の強度しかなかった。（マスクの前垂れは1600Nである）ジャケット、プロテクター、ニッカーは800Nの強度を持つ素材が用いられるようになり、服の重ね合わせや、ファスナー及び縫い目の位置など、様々なルール変更が行われている。



バイザー式マスク（現在は使用不可）



現在のマスク（1600 N）



プロテクター（800 N）

## B、その後のマスクのルール変更

一時、目の周辺に透明素材（バイザー）を使ったマスクも必須になっていたが、2009年11月に国際大会でバイザーが割れる事故が発生したため、FIEは暫定措置として直ちに透明マスクの使用を禁止し、2010年に恒久化された。

## C、国内での死亡事故（三重県スポーツフェスティバルでの事故）

2005年10月2日、三重県立津東高校（津市）の武道場で、フェンシングの試合をしていた県フェンシング協会理事長（55）の左脇の下に、対戦相手の男子高校生の剣が刺さった。病院に運ばれたが出血性ショックで死亡した。防具の袖口から剣が入り込んだらしい。傷は深さ約15センチで、肺に達していた。剣先は安全のために平らになっている。試合前に審判が双方の剣や防具を確認したが、異常はなかった。全身を覆うユニホームの下に利き腕の左腕と肩、胸を守る防具をつけていたが、左腕を伸ばした際に、相手の剣が入ったらしい。フェンシング歴約40年の有名な指導者でもあり、1975年の三重国体の成年男子エペで優勝。この日は競技委員長をしながら試合に出場していた。

## D、日本国内のルール変更

### ○2010年12月 日本フェンシング協会通達

ア、シニア大会等(全日本選手権大会、国民体育大会(成年)他) 当協会主催大会においての武器等、特に以下の3点について安全確保のため F.I.E 公認用具を適用する。

1 F.I.E公認マーク付きユニホーム上下800N

- 2 F.I.E公認マーク付き半袖付プロテクター800N
- 3 F.I.E公認マーク付きマスク1600N

イ、 ジュニア・カデ大会等(JOC カップ、国民体育大会(少年)、全国少年大会(中学生)他) これら主催大会においては、直近のアジア連盟主催の「2010年アジアジュニアカデ大会要項等」の内容に基づき、安全確保が妥当と思われるため、以下の3点について適用することとした。

- 1 ユニホーム上下350N
- 2 F.I.E公認マーク付き半袖付プロテクター800N
- 3 F.I.E公認マーク付きマスク1600N

ウ、 ミニム大会等(全国少年大会(小学生)他)

これら主催大会における武器等は、FIE 試合規則を準用するのが望ましいが、この時期の選手は身体等の成長が著しく変化することを鑑み、最低限、FIE 公認マーク付きの800N 半袖付プロテクターを着用することを義務づける。

## O2012年1月 日本フェンシング協会通達

「競技会の練習等も防具等の安全管理の徹底」について

公式 FIE 競技会の会場(大会練習会場も含む)において、練習する全ての選手は、FIE 規則に適合した装具と用具を着用することが義務付けられている。レッスンをとる全ての人は、規則に適合したグローブとマスクだけでなく、コーチ用プロテクターを着用しなければならない。レッスンを受ける全ての選手は、少なくともマスクとグローブを着用しなければならない。

## E、高体連主催大会のルール変更について

○全国総体、全国選抜大会については2012年3月の全国選抜大会から上記2（ジュニア・カデ）のルールが適用された。

○関東大会・関東選抜大会については、全国総体の意向を受けて2013年3月から適用された。

## F、問題点等

### 1、選手・保護者の負担増

安全性の面からは、より確かな防具を着用すべきなのは当然のことであるが、安全と思って購入したものが実は不安なものであったので買い換えよという流れに納得できない面があった。また、FIE 公認の防具は1.5倍から2倍の高価な物が多く、経済的負担が大幅に増加した。

国際ルールではフルレマスクの有効面の変更もあったため、高校3年間に2回マスクを買い換えるものも続出した。

### 2、大会によるルール適用の違いから起こる混乱

過渡期のため止むを得ないところではあるが、選手・保護者の負担への配慮から防具に関するルールの適用を遅らせる大会が多く行われ、かえって混乱が起こった。選手の勘違いもあれば、審判が他の大会と間違えてイエローカードを出すことさえ起こりやすい状況であった。

## G、安全なスポーツ「フェンシング」

安全性の高いスポーツとしてのゴルフを例に出し、フェンシングの安全性を強調した言葉で「ゴルフより安全」という言葉が使われるようになったが、実際の統計上そのようである。熱中症・捻挫・痙攣などは多少あるが、猛暑の中で行われるインターハイは会場の空調が必須となった。防具の着用については各指導者・選手が忠実に守っており、審判はルールに則った装具でないと試合を認めなくなったため、極めて事故が少ないのも事実である。